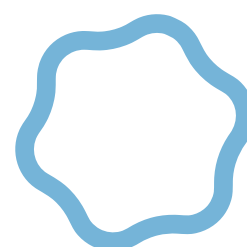


hgu_LAB. MAGAZINE

August 2019

vol.

008



SHOGI PLAYER

Tatsuki Sato



HOKKAI-GAKUEN UNIVERSITY

運命は 勇者に微笑む

Yoshiharu Habu

Tatsuki Sato

佐藤 樹

北海学園大学 法学部 1部

政治学科 2年

北海道札幌平岡高等学校出身

札幌市生まれ。本学の将棋研究会に所属し、2年次からは理事として他大学との連携を推進。小学校3年生から本格的に将棋を始め、中学時代から頭角を現し、それ以降現在まで、同世代では常に北海道トップレベルの実力を維持してきた。好きな言葉は、プロ棋士・羽生善治さんの「運命は勇者に微笑む」。「危険を顧みないで突き進んで行く感じが好き」とのこと。

盤上での会話を楽しみ、 自分らしい将棋を表現したい。

相手の王様を先にとったほうが勝ち！ …というのは、将棋を指したことがない人でもなんとなく知ってますよね。でもよく見ると「王将」が2枚ではなく、片方は「玉将（ぎょくしょう）」です。玉とは宝物のことで、本来は2枚とも「玉将」だったのだとか。そう言われると、お宝仲間の「金将」や「銀将」が隣に並んでいるのも納得です。さて、今回登場する佐藤くんは、学生将棋において北海道トップレベルの棋士。将棋盤の上では、相手の宝物を取るためにあらゆる手を尽くす佐藤くんですが、その先にはどんな「自分の宝物」があるはずだと読んでいるのでしょうか。

うちゅうの王をめざす姉弟

—— 大学生はどこで将棋の力を競うんですか？

いくつか大会がありますが、「学生名人戦」と「学生十傑戦」が大きな大会です。そのほか、小学生から大学院生までが出場する「全国オール学生将棋選手権戦」や、社会人の大会にも参加できるので、僕は月に1、2回は大会に出ている感じです。

—— かなりの数があるんですね。最近の主な結果は？

いちばんよかったのは、今年1月にあった「全国オール学生将棋選手権戦」の準優勝です。去年12月の「学生十傑戦」では全国11位、毎年6月にある「学生名人戦」では2年連続でベスト16という結果です。

—— これらの大会は北海道予選があつて？

そうですね。大体上位1～2名が全国に進みます。小学校3年生から将棋教室に通いはじめましたが、最初の数年間はなかなか勝てませんでした。中学校1年生のときに北海道で準優勝をして初めて全国大会に行き、高校でも3年間、北海道代表になりました。

—— 将棋教室に通うようになったきっかけは？

小学生向けの雑誌に連載されていた『うちゅうの王』という漫画ですね。姉と一緒に読みはじめたら、どんどん将棋に興味が湧いてきたんです。それで友だちに誘われて、姉と教室に行くようになりました。

—— お姉さんと仲がいいんですね。

わりと仲はいいと思います。高校のころは一緒に全

国大会にも出場しました。姉もずっと将棋を続けていて、今は将棋の楽しさを広く伝えるアイドル的なこともやっているんですよ（笑）。ライブに誘われるので、たまに観に行ったりしています。

—— 小学生のころから将棋一筋という感じ？

というわけでもなくて、幼稚園のころからテニスを始めました。姉がやっているのを見て、一緒にやりたいと。あとはピアノも、姉の影響で習ってました（笑）。テニスは中学校までやりましたが、比重としてはやっぱり将棋のほうが大きかったですね。

頭の中だけで、何十手先まで

—— 将棋の腕はどうやって磨くんですか？

大学の将棋研究会は週に一度、部室で活動しています。また、北海道将棋会館には月に一度、社会人や大学生が集まります。このように人がいる場では、対局を通じて知識を共有し、実戦感覚を鍛えています。自宅ではコンピュータを使って手順などを整理し、それを頭に入れて次に使えるようにしておく感じです。

—— やはり記憶力は大切だと思いますが、将棋以外の暗記ものも得意なんですか？

全然だめですね（笑）。将棋のことしか覚えられないというか、日常生活の記憶力はあまりよくないです。

—— そういうものなんですね（笑）。記憶力のほかにも将棋の強さの条件みたいなものはありますか？

序盤の決まったかたちの知識が豊富な人は当然強いんですけど、見たことのない局面でどれだけ多くの手を考えられるかという思考力や集中力も大事です。

—— 何手先まで読めるかみたいな？

そうですね。状況にもよりますが、たとえば10手ぐらいを何通りも読むとか。直線的な変化を3つぐらい読み、行き着く先の盤面図を思い浮かべて、それを比較するみたいなことを対局中には行いますね。

—— そういった力はどうやって伸ばすんですか？

読みの速さについては、詰め将棋といって、トレーニング問題みたいなものがあるんですけど、その数をこなすほど、頭の中で駒を動かすスピードが上がります。30手以上を必要とするめっちゃくちゃ難しい詰め将棋もあるので、そういうのを根気強く何時間も考えることで集中力を高めている感じです。

—— 実際に駒を並べず、頭の中だけで30手以上？はい（笑）

—— それはやはり、常人ではないですね（笑）。そのほか棋力を高めるためにどんなことを？

ネット将棋で対局をして、その結果をコンピュータで解析したりしています。ネット将棋のサイトには同時に3千人ぐらいがいます。ハンドルネームなので誰なのかはわかりませんが、知っている人の可能性もありますし、なかにはプロ棋士もいるようです。

My Rival

全国に行こう、また2人で

—— 2人の出会いは？

北川 小学校3年生です。北海道将棋会館の将棋教室で出会いました。僕のほうが先に始めていて、樹が後から入ってきた感じです。

佐藤 廉はすでにかかなり上のレベルだったので、がんばって追いつこうと思ってたよ。

北川 そして実際、すぐに追いつかれた（笑）

佐藤 すごく仲よくなったのは、中学校1年生からだね。北海道の大会で廉が優勝、自分が準優勝して、一緒に全国大会に行ったとき。

北川 そうそう、2人で全国へ。いい思い出だね（笑）。高校になると自分はテニスに打ち込んで、将棋からは離れてしまったんですよ。大学で将棋を再開するつもりもなかったんですが、偶然にも樹と同じ大学になったこともあり、もう一度やってみようと思い直しました。

佐藤 それで今は廉が将棋研究会の会長、僕が理事という感じでやっています。

—— お互いを駒にたとえると？

佐藤 廉は「飛車」ですね。すごくアクティブで、いつも縦横無尽に駆け回っている感じ。

北川 樹は「王将」でしょう（笑）。今はずっと北海道の学生のトップを走ってますから。一度、ちょっと弱くなってほしい（笑）。まあ、それは冗談として、大学生のうちに上のほうで対戦したいね。

佐藤 中学生以来、また2人で全国へ。それはぜひ実現したいよね。



Ren
Kitagawa

北川 廉さん
法学部 2部
政治学科 2年



SHOGI PLAYER | TATSUKI SATO
HOKKAI-GAKUEN UNIVERSITY



SHOGI PLAYER | TATSUKI SATO
HOKKAI-GAKUEN UNIVERSITY

人間対人間、だからおもしろい

——プロといえば、将来はプロをめざしている？
「めざしていない」と言えば嘘になりますが、今の自分のレベルで「めざしている」と言うのはおこがましい気がしています。アマチュアで活躍してプロ編入試験を受けるというルートはありますが、そのルートでプロになった人は歴史上2人しかいないんです。

——とても狭き門なんですね。プロへの登竜門としては「奨励会」という言葉もよく聞きますが。
はい、プロをめざす子は、小学生ぐらいから奨励会に入って、そこで勝ち上がることができればプロになれます。年にわずか4人だけ、しかも年齢制限は25歳までという、あまりにきびしい世界です。

——奨励会に属さないアマチュアの場合は、年齢制限がなく、意志がある限りプロをめざすことができます？
そうですね。最近アマチュアのレベルも上がっていて、プロをめざしている人が多いと聞きます。僕もプロうぬぬんは別として、社会人になってからもずっと将棋を続けたいという思いはあります。

——これまでのお話から、将棋で勝つためにはかなりの努力が必要だということがよく伝わってきました。ただ、あまりにも毎日根を詰めすぎると、将棋が好きなのかどうかわからなくなるので、将棋以外の時間も積極的につくるようになりました。友だちと出かけたり、趣味でカメラを始めたり。とはいえ、毎日2時間ぐらいは将棋と向きあっています。やらないと感覚が鈍ってしまう競技でもあるので。もちろん大会前には、1日中将棋ばかりになりますが。うまくメリハリをつけることが大事だと思っています。

——ところで、素朴な疑問なんですけど、対局中の正座は苦痛じゃないんですか？
小学生のころからずっと正座でやってきたので、慣れちゃいました（笑）。対局中は崩してもOKなんですけど、僕は正座で通します。気持ちが引き締まるので。最近は椅子での対局も多くなりましたけど。

——大会での服装に決まりはあるんですか？
アマチュアは自由です。全国大会の場合は、行った先で買った服を着て、新鮮な気持ちで臨むこともあります。プロはスーツや和服を着ることになっています。

——そういえば、好きなプロ棋士は？
羽生善治さんです。将棋への探究心がすごくて、ずっと勝っていて、本当に憧れます。羽生さんの著書は、戦術に関する本のほか、『直感力』や『大局観』など精神的なことを書いている本も参考になります。

——そもそも、将棋の魅力とは？
人それぞれ戦い方が違うんですよ。攻めが好きな人、守りが好きな人など、全然違う人がぶつかりあうところがおもしろいです。言葉を発さずに会話をしている感じで、人間同士の対局には、コンピュータとの対局では得られない何かがありますね。

——将棋の世界では、すでにAIが人間の力を超えていますけど、そういう問題ではないと。
はい。コンピュータは、人間が強くなるためのツールとして活用すべきですが、参考にしすぎると自分の色が出せなくなってしまうので、うまくつきあうのが大事だと思います。「佐藤くんといえば、こういう将棋だよ」というものを盤上で表現していきたいです。

何事も自分の考えを大切に

——話は変わって、法学部を志望したのはなぜ？
きっかけは中学校のころに見た法廷ドラマ『リーガルハイ』です。裁判シーンなどがおもしろくて、将来は法律関係を学んでみるのもいいかなと。それと、大学進学後も将棋を続けたかったので、道内では強豪のひとつでもある北海学園に入学しました。

——とくに興味をもっている法律の分野は？
民法と刑法です。民法は、土地の所有権をめぐる裁判など、暮らしに身近な内容を扱っているにもかかわらず知らないことばかりで、そういうのを知ることができるのがすごく楽しいですね。刑法は、こういう犯罪に対してはこういう判決が下されるなど、これもまったく知らない世界だったのでおもしろいです。

——そうした学びの先にある将来のイメージは？
まだ漠然としていますけど、選択肢のひとつとして公務員を考えています。札幌でずっと暮らしてきたので、この土地の発展にかかわる仕事がしてみたいです。ある局面において視野を広げ、いろんな手を考えるということ、将棋ではいつも意識してきたので、そういう部分を仕事にも活かしていければと思います。

——どんな大人になりたいでしょう
太い芯のある大人。法律も将棋もそうですけど、いろいろな考え方があることを知り、それらを噛み砕いたうえで、自分の考えを持ちつづけたいです。

My Favorite Teacher

王将と玉将がけんかをしないように

——石月先生は民法が専門分野で、先生のゼミに佐藤くんが所属しているということですが、ゼミではどんな学び方をしているんですか？
石月 今年は2・3年生を合わせて24人のゼミ生がいます。いくつかのグループに分かれてもらい、それぞれが別の立場で多様な事例について考え、議論していく感じですね。たとえば、貸したお金が返ってこないという事例の場合は、貸したグループ（原告）、借りたグループ（被告）、どちらの言い分が法的にみて説得力があるかを判断するグループ（裁判官）という具合です。
佐藤 すごくおもしろい反面、知識が追いついていないので、どう考えればいいのかわからないことが多いです。知識が豊富な3年生の先輩たちが論理を組み立てていく姿を見て、いつもすごいなと感じています。
石月 2年生の授業ではまだ扱っていない内容もあるので、それは仕方のないこと。今の3年生も1年前は佐藤くんと同じようなことを言っていましたから、きっと大丈夫だと思いますよ。
佐藤 はい、難しいということは、やりがいがあるということでもあるので、高いレベルの学びに慣れていきたいです。

——それぞれの立場から考えをぶつけあうというのは、将棋に似ている気もしました。
石月 なるほど。ただ、民法の場合は、ある利益をめぐる争っている両者を、どちらもできる限り納得できる結論へと導くことが大切です。将棋とは逆で、王将と玉将がけんかをしないようにしようという話ですね。論理を積み重ねていくという意味では、たしかに法律学と将棋は似ているとは思いますが。
佐藤 相手がこう指してきたら、自分はこう指すというやりとりを積み重ね、どんどん先まで読み進めていくという作業はどちらも似ていますね。そういうことを考えるのが僕は好きなのかもしれません。
石月 佐藤くんとはこれまで将棋の話をあまりしたことがなかったけれど、どういう戦法が好きですか？
佐藤 振り飛車ってわかりますか。
石月 ああ、振り飛車だと四間飛車？
佐藤 先生、詳しいですね（笑）
石月 いやいや、その程度しかわからないけど（笑）
佐藤 ちなみに僕は三間飛車ですね。
石月 そうなんですね。私は20年以上前、高校生のころに少しかだけ嗜んだことがありますけど、その当時、三間飛車はちょっとマイナーだった気がします。
佐藤 戦法の評価はけっこう移り変わるので、最近ではまた見直されてきていますね。
石月 将棋の勉強はどうやって？
佐藤 本を読んだり、プロの将棋を見たり、コンピュータで網羅的に研究したり…。あとは頭の中に将棋盤を思い浮かべて駒を動かします。それをどれぐらいできるかが大事なので。
石月 そう、それがなかなかできないんですよ。将棋ができる人って、それがすごいですよね。
——法律の分野ですごい人は、何がすごいんですか？
石月 とくに民法の場合は、先ほども言ったように、い

ろんな立場の人の利益をどのように調整するかが重要なので、すごい人というのは、普通の人なら目の前のこれとこれしか見えていないところを、後ろ側にあるものにまで気づくことができる人だと思います。
佐藤 それは将棋にもつながるというか、自分が網羅的に読んでいるつもりでも、本当に強い人はさらに違うところまで読みが入っていて、力の差を感じます。
石月 思いもよらない手という言い方をしますが、法律もそうなのかなという気がしますね。
佐藤 どうすれば視野を広げることができますか？
石月 それは私も知りたい（笑）。でも、すごくありきたりですが、何にでも好奇心をもつことが大切なんだと思います。がんばるよりも、おもしろがる。そうやってチャレンジできる人って魅力的ですよな。
佐藤 広さと深さ、どちらもある人になりたいです。

Masaki Ishizuki

石月 真樹
法学部
法律学科
講師



My Favorite Place



TOWER RECORDS 札幌ピヴォ店

札幌市中央区南2条西4 ピヴォ4F
011-241-3851
10:00～20:00

※2019年8月現在

音楽も将棋も、リアルな盤が好き。

タワレコ、好きです。学校帰りにふらっと寄ったり、予約していたCDを受け取りに来たりと、週に1回ぐらいは通っていると思います。ストリーミングサービスも使ってますけど、お気に入りのアーティストの作品は、やっぱりモノとして残しておきたいじゃないですか。聴くのは邦楽のバンド系が中心です。ピヴォに入って、エスカレーターで4階に上がると、すぐに新譜コーナーがありますよね。まずはそこで気になるCDを試聴して、それからその日の気分で店内を巡って、いつも大体30分ぐらいは滞在する感じです。CDショップの風景、なかでも手づくりのPOPがいいですね。書いた人のアツい想いが伝わってくる文章を読むのがすごく好きです。CDを買って帰ったら、自分の部屋にこもり、祖父から譲り受けたオーディオにCDをセットして、歌詞カードを開き、じっくり浸りながら聴きます。スマホだけでは実現できない趣があって、すごく好きな時間ですね。音楽も将棋も、リアルな盤はやっぱりいいなと思います。

My Favorite Things



扇子
Hand fan

昭和の偉大な棋士、大山康晴さんの書が入っている扇子です。高校の将棋部の先生からいただきました。将棋には大きく分けて、居飛車と振り飛車という2つの戦法があるんですが、大山さんは振り飛車を築き上げた第一人者。振り飛車が好きなこともあり、すごく参考になっている人です。プロ棋士が扇子を持って対局している姿には、小さなころから憧れていましたので、自分も対局中はずっと扇子を持っています。仰ぐためでもあるんですが、指で少しだけ開閉させて読みのリズムをとったりもしています。



テニスラケット
Wilson

幼稚園から中学校までテニスをやっていました。このラケットは、久しぶりにプレーしたいと思って高校3年生のときに買ったもの。史上最高のテニスプレイヤーとも称されるロジャー・フェデラーモデルです。今はたまたに家族でコートを借りてテニスを楽しんでいます。



藍色ミュージック
indigo la End
提供：ワーナーミュージック・ジャパン

インディゴ ラ エンドは昔からずっと好きなバンドです。もちろんCDはぜんぶ持っています。王道のポップソングからトリッキーな曲まで、幅広い音楽性を高度な演奏技術で聴かせてくれるところが好きですね。自分の中の2トップはインディゴ ラ エンドと米津玄師です。



財布
GOLD PFEIL

「全国オール学生将棋選手権戦」で準優勝した際、副賞でいただきました。といってもカタログギフトから選ぶという珍しいパターンだったのですが(笑)。食べものや旅行券などがあるなかで、やはり記念として残るものということで、ちょうど欲しかった財布に決めました。



腕時計
Daniel Wellington

高校2年生のころからずっと使っている時計です。もともと白い文字盤しかなかったモデルですが、黒バージョンが出るということで、予約して買った思い出があります。将棋の対局中は対局時計が置いてあるので、腕時計はあまり関係ないんですが、それでも必ず着けています。



さよならは青色
岩倉しおり
株式会社KADOKAWA

Instagramのフォロワーが30万人近くいる人気写真家のもので、自分にとっては初めて買った写真集です。この人の作品に出会い、写真に興味をもちました。植物や人物など、四季の風景が淡い感じで切り取られ、そこにストーリー性も感じられて、すごく好きな雰囲気です。



ミラーレス一眼カメラ
FUJIFILM

岩倉しおりさんの作品を見ているうちに、自分でも撮ってみたいと思うようになり、思いきってカメラを買いました。いつも通っている道や公園にも、これまで見えていなかった部分がたくさんあることに気づいて、歩くのがすごく楽しくなりました。旅行にも連れていきたいです。



タブレット・ノートPC
Microsoft

大学入学時に買いました。講義のレポートを書いたり、将棋の研究に活用しています。よく使われている将棋のフリーソフトがあって、プロアマを問わず、誰でも同じ環境で研究できるんですよ。素晴らしい時代だと思います。いずれは撮影した写真の編集もやってみたいですね。



刑法講義総論第5版
大谷 實
成文堂

いま受けている講義のなかで最もおもしろいと感じている「刑法I」の教科書です。授業はこの本の内容をわかりやすくまとめたレジュメで進行していくので、細かく知りたいときに辞書的に開く感じです。著者の考え方には、いつも「なるほど」と納得させられます。